自然に生きる野生ニホンザルの生活行動と人間行動の比較行動学的研究

－「集団で生きる」行動の観点から

上 原 貴 夫

(長野県短期大学)

キーワード：野生ニホンザル 人間の行動 比較行動学

Comparative Behavioral Study on Life Behavior of Wild Japanese Monkey and Human Behavior

Takao UEHARA

(Nagano Prefectural College)

Key Words: Wild Japanese Monkey Human Behavior Comparative Study

目 的

1970年代より野生ニホンザルの研究を進めてきた。本研究は野生ニホンザルの行動についての研究であると同時に、人間行動についての研究をねらいとしているものである。人間行動の起源を野生ニホンザルの行動とともに比較行動学的にとらえることを通してその自然状態的な起源に基づいて理解していくことをねらいとしている。人間行動については人間の社会行動に主眼を置いている。ニホンザルも集団で行動する動物であり、個々の個体間には血縁や役割関係などによって様々な関係が形成され社会的行動のもとで生息している。

本報告で具体的な研究対象とする行動は「人間の集団行動」である。人は個別に単独で行動するとともに、生活においては家族を持ち、なんらかの組織に所属し、多くの人とグループを組んで生活している。ニホンザルも「群れ」で生活する動物である。野生で生きるニホンザルにおいていとなまれている集団生活におけるメリット・デメリットを考察し、人間集団の起源に関する理解の視点をを得ることを目的とする。

方 法

(1) 研究対象：対象は野生ニホンザルおよび人間行動である。野生ニホンザルは1970年代より継続して調査・観察している。対象は地域としては群馬県および長野県に生息するニホンザルである。なかでも直接的にフィールドとしている地域は群馬県・長野県の県境部に広がる碓井峠一帯であり、そこに生息するニホンザルを対象としている。

(2) 調査・記録 ニホンザルについての調査は追跡調査とする。群れと共に移動し、観察する。記録はビデオ撮影、写真、メモである。

(3) 分析方法 これまで積み重ねてきた資料に基づく。

結 果

(1) 生息の状況 1) 全域の生息状況：群馬県および長野県においてはほぼ全域に生息する。群馬県では関東平野の埼玉県に近い地域で生息が見られないぐらいである。生息地は高崎市倉淵地区、桐生市、沼田市、富岡市、安中市の松井田地区、みどり市、多野郡上野村・神流町、甘楽郡下仁田町、吾妻郡中の条町、嬬恋村、利根郡片品村、川場村、水上町などにわたっている。長野県ではほぼ全県にわたって生息域が広がっている。北信といわれる飯山地域でそれほどザルの生息が聞かれないぐらいである。2) 本報告で取り上げるフィールドでの生息状況 フィールドは群馬・長野両県にまたがる地域であり、行政区画では群馬県安中市松井田町および長野県北佐久郡軽井沢町に広がる地域である。この地域においては軽井沢町内にも野生ニホンザルが遊動しているが、この群れももともとは県境部の碓井峠を遊動していた群れである。1985年頃を中心として軽井沢に進出し、そのまま現在も軽井沢を遊動域としているものである。当時は碓井峠一帯には3群が生息していた。その後この地域の群れは変遷をたどるが現在は碓井峠を通過する国道18号線沿いを中心に大きく二つの群れが生息している。本報告で対象とする群れである。

(2) 野生に生きるニホンザルの生活

1) ニホンザルの生活特性 群れおよび集団で生きる生活を

基本としている。ここでは「群れ」とは、親子などを含んで複数の個体で形成される。「集団」は通常若オスなどが複数集まって形成されるとする。決まっていわずに「巣」は持たないが、生息域としておよそ一定の生活域（生息域）を持つ。

2) ニホンザルの生涯 およそ4～5歳で成体となる。メスは生涯を同一群で過ごす。隔年で1個体を生んでいく。オスは若オスとなると春から夏・秋にかけて群れから離れる。その間1個体で過ごすか、若オスどうしの集団を形成する。秋には群れに入るか群れの周辺で過ごす。高齢になると群れを離れいわゆる「ハナレ（ザル）」となる。

3) 年間の生活 オスは春から群れを離れて遊動する。秋が交尾期である。春にかけて出産期となる。

4) 1日の生活 およそ日の出前に目覚める。その後、周辺で朝の採食行動を行う。日中は移動（遊動）か、夏などでは木陰など気温のあまり上がらないところで過ごす。午後、14時や15時ごろから採食が始まる。移動採食をしながらその日の寝泊まり場を見いだしていく。寝泊まり場は群れ全体で一定の場所を使う。

考 察

ニホンザルの生涯や年間および1日の生活、繁殖、食餌、移動、泊まり場の選定、害敵への対処、経験の伝達など主な生活行動において集団の生活を巧みに取り込んでいる姿が見える。（下記に示す。）

【群れによる生活のメリット・デメリット】

	メリット	デメリット
採食	食べ物発見が容易	競争生まれる
繁殖	メイトिंगが容易	競争生まれる
安全	複数で対処できる	同調行動を求められる
泊まり場	発見が容易	競争生まれる
移動	追跡行動ができる	同調行動が求められる
経験の伝達	学習が容易	独自性が現しにくい

* 群れによる行動の観点から示した。

これらの取り込み方は生活の組み立てと密接に結びついている。その意味で集団や群れは生活の基盤を形成している。人間自身の生活も家族やグループなど集団で形成されている。つまり、人と人とが集まって形成される集団や人間関係を形成する結びつきには、心情的な要因もあるが、同時に人間生活の基盤としての意味があると考えられる。

参考資料

上原貴夫 ヒューマン・エソロジーから見た人間関係の成立 1993. 11 日本人間関係学会第1回大会

上原貴夫 人間の「生きる」基本としての人間関係に関する研究—比較行動学の視点からみた人間関係 2006. 12 人間関係学研究 第13巻 日本人間関係学会

上原貴夫 野生ニホンザルの分布や生息を動態的にとらえる研究 2009. 8 日本心理学会第73回大会

上原貴夫 野生ニホンザルの生息域の「重なり」に関する研究 2011. 9 日本心理学会第75回大会

(日本心理学会第76回大会 2012. 9—11. 12. 13)